〔研究ノート〕

村田川流域の６～７世紀の土師器の再検討

―千葉市榎作遺跡の分析を中心に―

小　林　清　隆

挿図目次

第１図　榎作遺跡出土土師器の主要器種編年図 ①……240
第２図　榎作遺跡出土土師器の主要器種編年図 ②……241
第３図　榎作遺跡周辺の主要遺跡……245
第４図　（２）・（３）期の搬入と考えられる杯……246
第５図　（３）・（４）期に出現する杯Ｅの分布……248

1．はじめに

村田川という小河川が、房総半島の北西部に位置する千葉市と市原市の境を流れて東京湾に注いでいる。この川の流域、特にその下流域の台地上には旧石器時代から中・近世にわたる数多くの遺跡が所在し、最近の各種の開発に伴い、調査される遺跡も増加の一途をたどっている。当然古墳時代の集落調査の機会も増えて、資料の蓄積には目をみはるものがある。そのような環境のなかで、鉄道の建設工事に先立って、千葉市赤井町に所在する榎作遺跡の発掘調査を当千葉県文化財センターが実施した。

発掘調査の結果、237軒の竪穴住居跡をはじめ、掘立柱建物跡、土坑、溝など多数の遺構が発見された。なかでも古墳時代後期の遺構は、著しい重複関係を有し、出土遺物も土師器・須恵器の土器類を中心に豊富でかつ多彩であった。この成果については、平成4年3月に報告書を刊行したところである（小林ほか　1992）。

報告書では、路線内の調査であると断ったうえで、「土師器主要器種編年図」を掲載した。これは、榎作遺跡の調査成果の一端として示したのであるが、古墳時代後期土器についての研究が目にみえて活発である状況のなかで、最近の研究成果をとりいれた記載を行い得なかった。

県内では、1987年に開催された、「房総における古墳時代後期土師器の年代と地域性」の理解を目的としたシンポジウム（杉山ほか　1987）以来、編年とともに地域性を問題にすえる方向がみられ、それを具体的に実践してきている現状がある。印旛村に所在する平賀遺跡群の土器の分析を行った村山好文氏の研究（村山　1988）をはじめ、長谷川厚氏の、房総地方を対象範囲にいれた一連の研究（長谷川　1989・91ａ・91ｂ・92）など、啓発される論考が相次いで発表されている。また、金丸誠氏による、千葉県北部全域を見渡した検討（金丸　1992）と、小沢洋氏による、西上総地域の編年（小沢　1992）が提示され、最近における研究の深化をうかがうことができる。さらに、千葉市高沢遺跡（関口ほか　1990）、市原市中永谷遺跡（白井ほか　1991）などの大規模な集落の発掘成果が報告され、資料的な充実期をむかえている。

小稿は、このような段階にあるこの時期の土器研究をふまえ、榎作遺跡で作成した編年案の補足を主たる目的とするものであるが、あわせて周辺の様相と比較し、本地域の地域相についてもふれてみようと思う。報告書を刊行してから、まとめの部分全般にわたる見直しの必要を痛感しているので、本来ならここでそれを実行するのが本筋かもしれないが、そのまえの仕事として、現状の整理を優先させたいと思い、小稿をまとめることにした。

2．榎作遺跡における主要器種の分類と編年案

a．土師器主要器種の分類

榎作遺跡から出土した古墳時代後期の土師器の器種には、杯、高杯、甕、甑のほかに、壺、鉢などと、ミニチュア、手捏ねがある。そのなかで量を多く占める器種は、杯、高杯、甕、甑の4器種である。報告書では、上述の主要4器種について、以下に示すような分類を行った。分類の基準は、第一に形態の特徴に主眼をおき、手法的な差異を加味して行ったが、結果的には曖昧さが払拭できず、恣意的といわれても仕方ない部分もある。今後、分類の部分的な追加および統合なども十分考慮したうえ、基準を明瞭にしなければならないが、混乱を避けるため、本稿では報告書作成時の分類を提示しておく。ただ報告書において、説明不足から形態の特徴を正確に伝えていないか所については、書き改めたり補足を加えていくので、報告書と字句がまったく同様ではないことは断っておきたい。

杯の分類

杯A　いわゆる和泉式からの系譜をたどれると考えられる杯で、丸底で器高が高くつくられ、口縁部が外に開くもの。口縁部の特徴に基づき、次のように3類に分けた。

1．口縁部が外傾し、内面の体部との境に稜がつく、いわゆる内斜口縁となるもの。

2．口縁部がゆるやかに外反し、内面の体部と口縁部の境に稜が生じないもの。

3．口縁部が小さく外傾し、口唇部をつまみ上げて納めるもの。

杯B　杯Aと同じ系譜と考えられ、器高がやや高くつくられもので、口縁部がわずかに内彎するか、そのまま立ち上がり体部との間に境をつけないもの。底部の形態から、次のように2類に分けた。

1．底部から体部にかけて丸みをもっているもの。

2．平底となるもの。

杯C　須恵器の杯蓋を模倣したと考えられる形態のもの。口縁部高と体部高の割合などから、次のように3類に分け、また塗彩からa～cの違いを認めることができる。

1．口縁部高が体部高より低く、口縁部が外反するか上方へ立ち上がっていくもの。

2．口縁部高が体部高より高く、口縁部が外反するか上方へ立ち上がっていくもの。

3．全体に器高が低くつくられ、口縁部のたちあがり高も低いもの。

a．赤　　彩（器表面に赤色塗彩が施されているもの）

b．黒色処理（黒彩・黒色仕上げ・漆仕上げ・漆処理などとよんでいる、黒色系統の色調になるよう仕上げたものを一括する。本稿では用語のうえでは黒彩＝黒色処理として使用し、断りのないところでは手法の違いは分けないこととする。）

c．塗彩の認められないもの

杯D　須恵器の杯身を模倣したと考えられる形態のもの。口縁部のたちあがりの長さなど

から、次のように3類に分け、また塗彩からa～cの違いを認めることができる。

1．口縁部がやや長く内傾して納められるもの。

2．口縁部が短く内傾して納められるもの。

3．全体に器高が低くつくられ、口縁部も短く内傾して納められるもの。

a．赤　彩

b．黒色処理

c．塗彩の認められないもの

杯E　丸さのある底部と、内彎しながら大きく開くように立ち上がる体部の、かなり下位に段状の稜をもつもの。（稜のつく位置が下位になるため、底部の丸さは比較的ゆるく、体部高の占める割合が大きく、内面は全体に曲面となる。）

杯F　丸底で口縁部がS字状に外反する形態で、「比企型の杯」とよばれているもの。

杯G　丸さのよわい底部から体部へ移行し、体部がわずかに内彎しながら立ち上がり、そのまま口縁部へつながっていくもの。

杯H　底部から体部上位にかけてわずかに内彎し、口縁部が小さく立つか開くように納められ、器高があまり高くならないもの。

杯I　丸さのよわい底部から体部へ移行し、口縁部が小さく外反して納められるもの。

杯J　平底をもち、器高が高くならないもの。体部の特徴から次のように2類に分けた。

1．体部がわずかに内彎するように立ち上がるもの。

2．体部が直線的に開くように立ち上がるもの。

高杯の分類

高杯A　杯部の底体部に丸さがあり、外反あるいは外傾する口縁部との境に稜をもつもの。脚部の特徴から次のように2類に分けた。

1．脚高が高くつくられ、裾部を広げて納めているもの。

2．脚高が低くつくられ、裾部を広げて納めているもの。

高杯B　杯部に稜がなく、口縁部がわずかに内彎するかそのまま開き、杯部高がやや高くつくられるもの。脚部の特徴から次のように2類に分けた。

1．脚高が高くつくられ、裾部を広げて納めているもの。

2．脚高が低くつくられ、裾部を広げて納めているもの。

高杯C　杯部の底体部の内彎度が全体に弱く、開くように立ち上がって、口縁部との境に稜をつくらないもの。脚部の特徴から次のように2類に分けた。

1．杯部と脚部の接合部分（基部）の径が大きく、脚高が高くなるもの。

2．杯部と脚部の接合部分（基部）の径が大きく、脚高が低くなるもの。

高杯D　杯部の底体部の内彎度が全体に弱く、開くように立ち上がって、口縁部との境に弱い稜をつくるもの。脚部の特徴から次のように2類分けた。

1．杯部と脚部の接合部分（基部）の径が大きく、脚高が高くなるもの。

2．杯部と脚部の接合部分（基部）の径が大きく、脚高が低くなるもの。

高杯E　杯部は体部下半で内彎し、体部が高く立ち上がって口縁部がゆるやかに外反する深いつくりで、やや太い円筒状の脚部がついて、裾部をハの字状に広げるもの。

甕の分類

甕A　胴部に球状の膨らみをもつもので、口縁部の特徴から次のように3類に分けた。

1．くの字状に折れるように外傾するもの。

2．ゆるやかに外反するもの。

3．一度直立気味に立ち上がって、上方で短く外反するもの。

甕B　胴部に卵球状の張りをもつもので、口縁部の特徴から次のように3類に分けた。

1．くの字状に折れるように外傾するもの。

2．ゆるやかに外反するもの。

3．一度直立気味に立ち上がって、上方で短く外反するもの。

甕C　いわゆる長胴甕で、胴部の張りが弱く全体に細長い形態を示すもの。

甑の分類

甑A　胴部の中位に膨らみをもつもので、口縁部の特徴から次のように2類に分けた。

1．ゆるやかに外反するもの。

2．短く外傾するもの。

甑B　胴部の上半にわずかな張りをもち、一度弱く絞られるようにして口縁部へ移行するもので、口縁部の特徴から次のように2類に分けた。

1．ゆるやかに外反するもの。

2．短く外傾するもの。

甑C　胴部の張りが弱く、胴部がじょじょに開きながら立ち上がり、器高が低いもの。

以上が榎作遺跡の出土土師器のうち、主要器種となる杯、高杯、甕、甑の分類である。これからはこの分類に基づいて話を展開していくが、繰り返しを避けるため、例えば須恵器の杯蓋模倣で、口縁部高が体部高より低く、赤彩が施されたものを「杯C1a」というように標記していこうと思う。

b．榎作遺跡の時期区分

榎作遺跡では土器に基づいて第Ⅰ期から第Ⅻ期にわたる時期区分を行った。この作業は「時期区分を導き出す一過程」、と位置づけている土器分類を基に、型式学的方法を主眼にすえ、竪穴住居跡から出土した土器総体での特徴を抽出し、層位の検証が可能である場合はそれを援用して検討を加えた。勿論その基本部分の構築には、これまでの研究成果や周辺の調査で蓄積された情報が土台となっている。その結果、弥生時代終末期から古墳時代初頭と想定した第Ⅰ期と、須恵器模倣の土師器杯が出現する前段階である第Ⅱ期との間に、時間的な空白期の存在があり、以後は連続する状況が明らかになった。ここで取り上げる期間は、さらにａ～ｃ期の細別を行った第Ⅱ期の末期である第Ⅱｃ期から、奈良時代初頭に位置づけた第Ⅶ期までとしたい。それでは設定した時期区分にしたがって、器種の組み合わせ、手法上の特色などの、その概略を示していくことにする。

第Ⅱｃ期

本期は竪穴住居跡037Ｂ、047Ｂ、058Ｆ、132Ａ、141、176などから出土した土器を指標とする。杯は和泉式の土師器杯の伝統から発展してきたと考えられる、椀形の杯Ａ１・Ａ２・Ｂ１類が主体である。また少量ながら口縁部が上方へ立ち上がって、須恵器杯蓋を意識してつくたのではないかと思えるものも存在する。ただし、その形態の杯は、体部と口縁部が、調整の違いによって分けられるにすぎず、そこに須恵器にみられる「稜」をはっきりと作出している様相はみられない。これら杯群の器面の調整は、ヘラ削りによって整えられ最終的に丁寧なナデで仕上げられ、ほとんど全部の個体といってよいほど内外面に赤彩が施される。そしてその赤彩塗彩範囲は、底部の小範囲を除いて大部分におよぶ例が多い。

高杯の出土頻度は比較的高い傾向を示し、Ａ２、Ｂ１、Ｂ２類が認められる。いずれも外面は全体に赤彩され、杯部の内面にも赤彩が施される。

甕は胴部に球状の膨らみをもつＡ１、Ａ２、Ａ３類と、卵球状の胴部形態を示すＢ２類から構成される。

甑はＡ１、Ａ２、Ｂ１、Ｂ２、Ｃ類がありやや多彩な状況をみせる。このうち甑Ａ１類には甕の底部に孔を穿ったような形態をしていて、外見的に甕と判別がつきずらいものが存在する。

このほかの器種では、坩形に近い小型の壺や、口縁部が外傾するやや大型の壺と、若干の鉢や手捏ねがある。

第Ⅲ期

本期は竪穴住居跡048、058Ｅ、078、087Ｆ、108、166などから出土した土器を指標とする。

杯はＢ１類が多く存在するが、杯Ａ１類は散見される程度に減少している。かわって目を引きつけるのは、須恵器杯蓋模倣の杯Ｃと、須恵器杯身模倣の杯Ｄの出現である。とりわけ口縁部高が体部高より低くつくられ、口縁部が外反するか上方へ立ち上がっていくＣ１類が目立っ

た存在となっている。その杯Cについては口縁部高が体部高より長く立ち上がる２類や、その逆の３類も含まれるものの、須恵器杯身模倣の杯Dはわずかにとどまっている。また杯Cの１・２類が、須恵器の杯蓋をよく模しているものが多いのに対して、杯Dは口縁部高が体部高より短く内傾する２類に限定される。そして須恵器杯身の受部を写した稜がつくられるものもあるが、それは単に口縁部を急激に内傾させたにすぎず、全体に模倣の精度が杯Cより劣る観がある。須恵器模倣の杯でも、蓋模倣が優越した様相であるといえる。杯C・Dの調整は体部がヘラ削りが中心で、その後ナデによって仕上げられるものが多く、内面はナデ主体の調整である。まれに内面に１本ずつ施した、放射状の磨きが施されたものがある。杯A・Bは第IIc期同様内外面に赤彩が施され、杯C・Dも赤彩されるものがほとんどを占めている。赤彩されていないものは杯C２類に少量存在する。この塗彩されないもののなかには、焼き色自体が橙色になり、胎土の質感が赤彩されているものとやや異なって、口唇部の内側に段状の稜がつくられているものが認められる。量的な割合ではB１、C１a、C２a、A１、D２a類とつづき、A２、C２c、C３a類がわずかずつ同量程度に含まれる。

高杯は、第IIc期と同じように、高杯A１、A２、B２類が存在ものの、出土点数は減少している。長脚となる高杯A１類は、竪穴住居跡151などから出土しているが、その例は杯部との接合部からすぐに裾部に向かってゆるやかに開きながら下降する脚部をつくるので、和泉式に特徴的な、脚柱部に膨らみを有する長脚の高杯とは、系譜が異なるとみておいたほうがよいかもしれない。いずれの類も杯部の内外面、脚部の外面に赤彩が施される。量的にはB２類がやや多く、A１、A２類がわずかずつある。高杯Bについては次の段階では認められないので、本期がその終末の姿となる。

甕Aの２・３類が全体の半数を占めるものと考えられるが、口縁部がくの字状に外傾するA類についてはほとんど姿を消している。本期では甕Bの存在が目立ってきており、特に口縁部がゆるやかに外反するB２類が、A２・３類の量を上回っているとみられる。また甕Bの１・３類も存在するが、例外的なあり方を示す。これらに伴い、長胴の甕Cがわずかに加わっているので、本期がその初現の時期と位置づけられる。甕における胴部外面の調整は、ヘラ削りが中心で、そのままか、さらにそのうえにヘラナデが施されて仕上げられるかである。

甑はA１とC類が減少し、B類が中心となっている。B類のなかでは、１類が多く見受けられる。

このほかの器種では、壺、鉢、手捏ねなどがあり、赤彩が施されたものも認められる。鉢は杯A・B・Cを大型化した相似形のものと、杯・椀と大きさが近似し、区別がつき難いものなどがある。

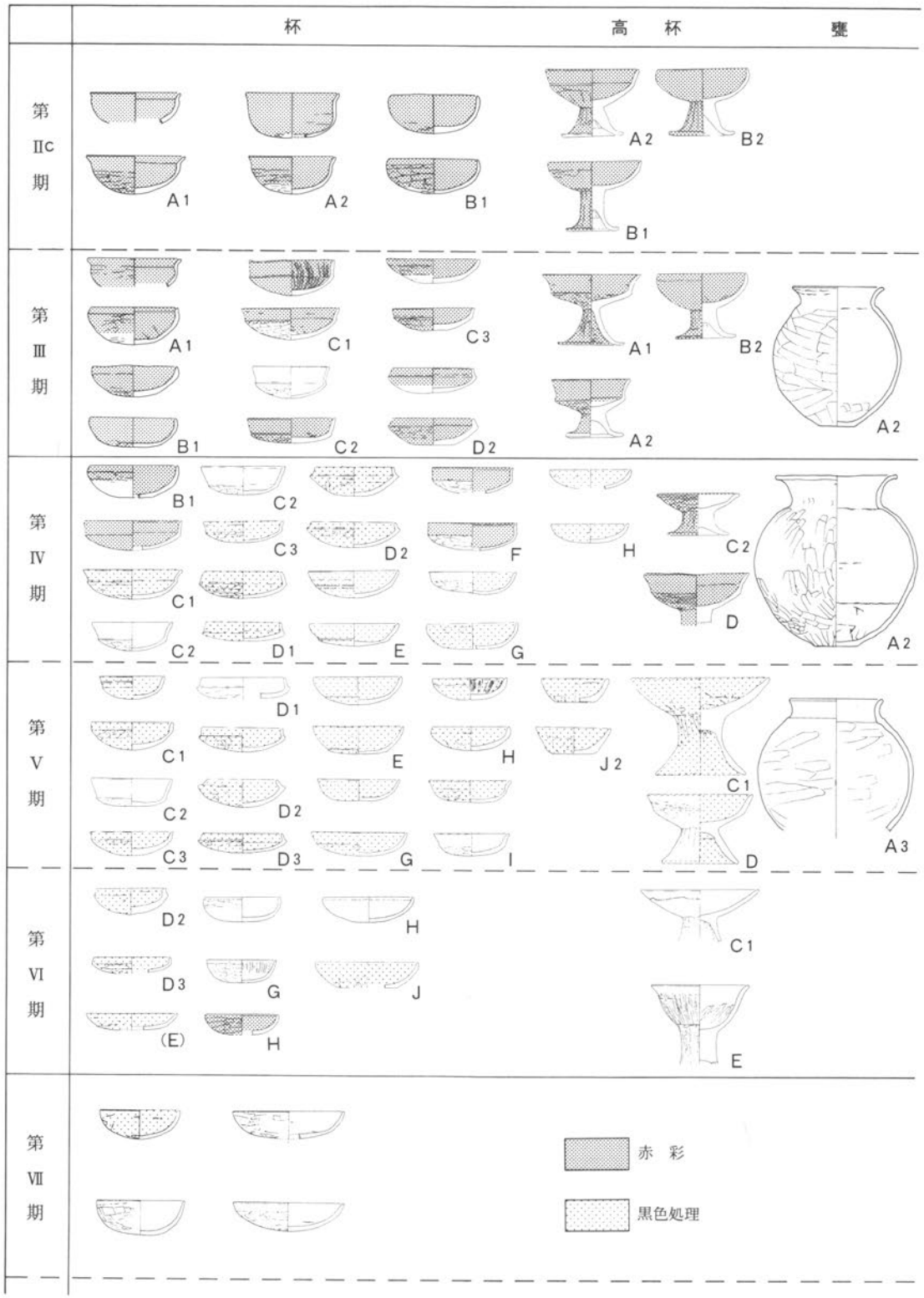
第Ⅳ期

本期は竪穴住居跡037D、044A、059B、061A、112などから出土した土器を指標とする。

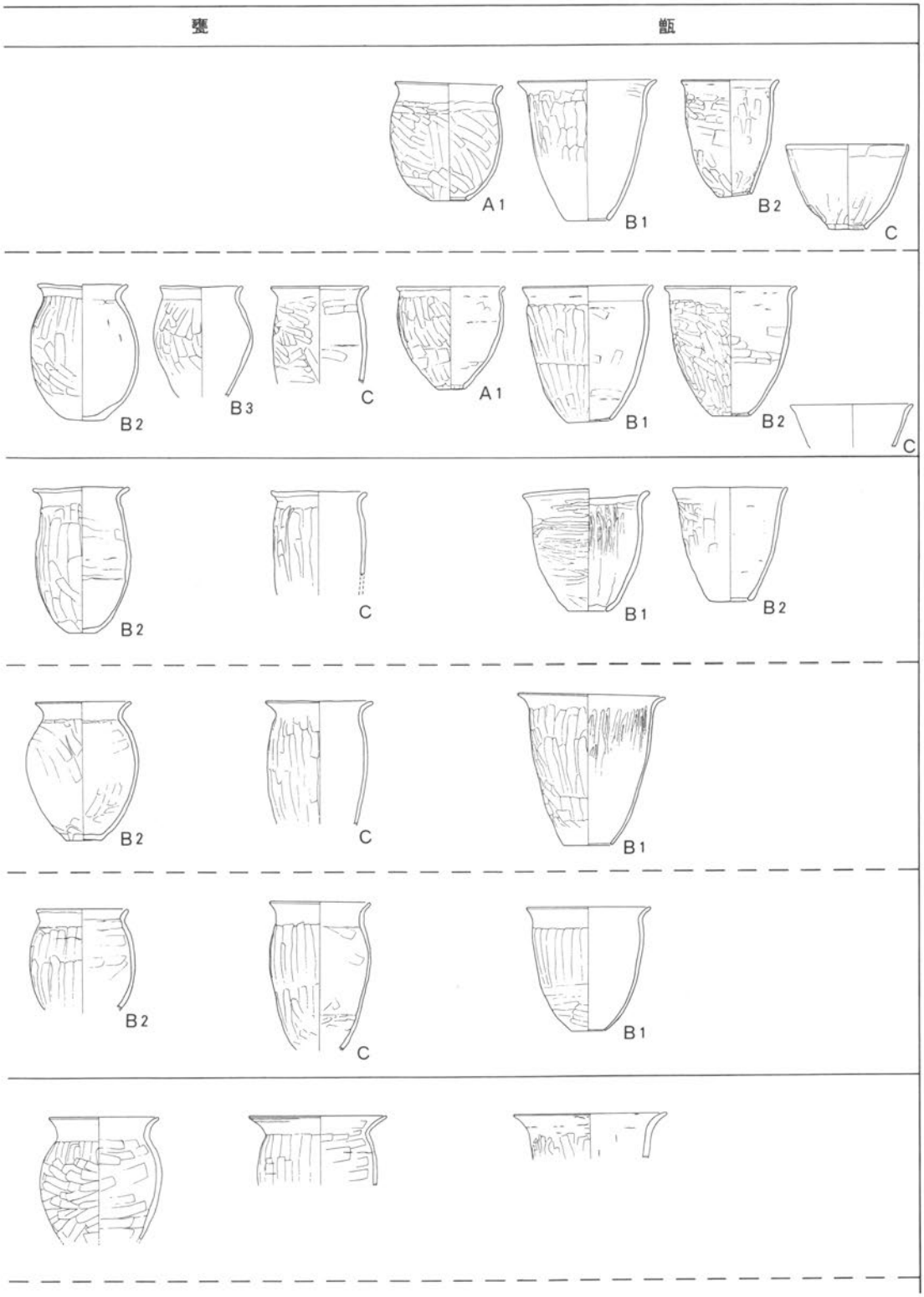
杯Aがまったくみられなくなり、Ｂ１類がわずかに残存するにすぎず、本期において和泉式からの系譜をもつ丸底半球状の杯類が消滅する。これが本期の特徴の一つである。二点めとしては、第Ⅲ期に引き続き、須恵器蓋模倣の杯Cが、杯のなかで主体となるものの、須恵器杯身模倣の杯Dの割合も、飛躍的に増加していることがあげられる。もっとも目立つ特色は、杯E・F・G・Hが加わると共に、杯F以外に黒色処理の手法が用いられ、それが器表面処理の主流となって、従来の赤彩塗彩が一気に減少する点にみいだすことができる。第Ⅲ期よりも明らかに増えている杯Dの、特に１・２類は、須恵器の杯身の受部に相当する口縁部と体部の間につくられる稜がシャープに張り出し、稚拙だった第Ⅲ期とは対照的に、精緻さがうかがわれる。まだ主体となっている杯Cのなかの２類には、塗彩されず口唇部の内側に段状の稜をつけるものがある。これは前の時期から存在していたものだが、これとは別にＣ２類の一部に黒色処理が施され、口縁部の途中に段がつくられるものが含まれる。ほかに杯Ｅ・Ｆ・Ｇ・Ｈ類が新たに加わる。また、いわゆる「比企型の杯」とよばれる杯Ｆは本期のみにわずかに認められ、きわめて特異な様相であるが、他の杯Ｅ・Ｇ・Ｈはこれ以降につながっていく。さて、形態と並び、器表面処理におこった黒色処理という大きな変革およびそれに付随するかのように採用された内面のヘラ磨き調整が、本期の際立った特色と位置づけられる。黒色処理には、カーボン吸着、漆の高温焼付け（＝漆処理）などの方法が考えられており（永嶋　1987・88・92)、その出現期である本期の黒色処理にも、表面や断面の肉眼観察から、手法の違いを認めることができる。漆処理と識別されるものでも、黒色が強くなるものと、飴色あるいは暗黄褐色～褐色のものが存在する。そして黒味の強いものは杯Ｃ１や杯Dに多く、杯Eは後者の色調が多い。また黒色処理が施されるものは、内外面ともヘラ磨きが行われる場合が多く、内面に対し外面が雑となるが、杯Eは内外面とも非常に丁寧なヘラ磨きが施され、ほかと趣を異にしている。全体の量的な傾向にふれると、Ｃ２ｂ、Ｃ３ｂ、Ｄ２ｂ類の割合が比較的多く、Ｂ１・Ｄ３ｂ・Ｅ・Ｆ・Ｇ類およびＣ１ａ・Ｃ１ｂ・Ｃ２ｃ・ＤＩｂ・Ｈ類などが含まれ、Ｃ１ｃ・Ｃ２ａ・Ｃ３ａ・Ｄ２ａ・Ｉ類が散見される。

高杯は第Ⅲ期にまして出土数が低下しており、完形を保っている例がわずかである。高杯Aは１点しか認められず、本類はここに終わる。それにかわるように高杯Ｃ・Dが出現している。好資料に欠けるが、高杯Ｃ・Dに２類が現れているのは確実であろう。また、脚部の途中に段をつくるものがある。いずれも裾部はそのまま開きながら納められ、その端部を極端にめくれ上げるようにするものは、すでになくなっているとみてよい。また杯同様に、赤彩が施されたものに加え、黒色処理が外面や杯部内面に行われるものがある。

甕も完形で出土した量はけっして多くないが、やはり主要器種であることに違いない。球状の張りをみせる甕Aは２類が一定の保有割合をたもち、３類がわずかにみられる。卵球状の張りをもつ甕Bは、増加の状況が明らかで、２類が主体となり、一部に口径が胴部最大径を越え



第1図　榎作遺跡出土土師器の主要器種編年図①



第2図　榎作遺跡出土土師器の主要器種編年図②

るものもある。これにＢ１類とＣ類が含まれ甕類を構成する。胴部外面の調整はもっぱらヘラ削りによって行われ、この点に関しては第Ⅲ期と大差はない。

甑はＡ・Ｃ類が消滅し、Ｂ１・２類のみとなる。そして内面の調整に縦方向のヘラ磨きが施されたり、胴部外面下半にヘラ削りの後にヘラ磨きが行われる例が認められる。ヘラ磨きの状況を内外面で比較すると、外面に比べ内面がより入念であるのが一般的である。

このほかの器種では、わずかの壺と、鉢があり、手捏ねが第Ⅲ期より増加している状況が認められる。

第Ⅴ期

本期は竪穴住居跡023、043Ａ、044Ｆ、187、190などから出土した土器を指標とする。

杯は第Ⅲ期から継続するものに新たな類も加わり、バラエティに富んでいる。また、杯全体の傾向として、前の時期より大きさが、小さくなる様相がうかがわれる。本期の杯の特色は、須恵器杯身模倣の杯Ｄが、杯蓋模倣の杯Ｃを上まわる点を第一に指摘できよう（注１）。また、まったくといっていいほど、赤彩を施すものがなくなっていることも注目される。個別にみると、杯Ｄは２類を主体にし、３類も目につく。杯Ｃの１類には、口縁部の途中に明瞭でない段を設けるものがわずかに含まれる。ほかの類では、比企型の杯である杯Ｆの存在は認め難く、杯Ｉや、平底をつくる杯Ｊが新たに加わる。第Ⅳ期から組成に含まれるようになった杯Ｈは、その出土頻度が目について増加している。器面調整は内面のヘラ磨きが普及し、杯Ｈなどには放射状の磨きが行われているものも出現している。第Ⅳ期以上に黒色処理が盛行する時期であり、特に杯Ｅは入念な内外面のヘラ磨きと、漆処理との結びつきが観察される。数量的な比率では、Ｄ２ｂ、Ｈ類が比較的目立ち、Ｃ１ｂ、Ｄ３ｂ、Ｅ、Ｇ、Ｉ類もある程度の量は認められ、Ｃ１ｃ、Ｃ２ｂ、Ｃ３ｂ、Ｄ１ｃ、Ｄ２ｃ、Ｊ１、Ｊ２類などが散見される。本期は大きさの面で総体的に第Ⅳ期より小型・低器高になる傾向が現れるとともに、上述のようにさまざまな形態の杯が杯組成を形成する。それは須恵器模倣杯が、すでに衰退期にさしかかってきたことを示す現象ともうけとれるのである。

高杯は第Ⅳ期では減少する状況がみられたが、本期では完形に近い遺存状態を保つものもあり、わずかに増加の傾向が認められる。杯部と脚部の接合部の径が大きくなる高杯Ｃ・Ｄ類が、ほぼ同じような割合でみられ、そのなかでＣ１類が主体となる。内外面に黒色処理を施すものが大部分を占めるが、内面のみに施す例もみられる。杯同様に杯部の調整にヘラ磨きが多用されている。

甕はＢが明らかに多くを占めるようになる。しかし球状の膨らみをもつ甕Ａの使用も確実につづいており、２・３類が出土している。また甕Ｃについては増加の様相をみせる。主体となる甕Ｂは、胴部の最大径を中心において整った卵球状の胴部形のものと、最大径を胴部上半におくものとがある。胴部外面の調整は、ヘラ削りによって行われるのが一般で、軽くナデを施

して仕上げるものもあるが、概して胴部の張りが弱くなるほど、ヘラ削りのみによって調整されている傾向がある。

甑はＢ１類に限定される。そして胴部上半の張りが弱くなるのが特徴である。また、系譜としてはつながらないものだが、口唇部がつまみ上げられて納められるものが１点存在する。内面の調整は縦方向のヘラ磨きが主体である。

このほかの器種では、鉢がこれまでになく増加しているのが目につくほかは、壺が少量残存し、手捏ねが第Ⅳ期と近似した割合で出土している。

第Ⅵ期

本期は竪穴住居跡024Ａ、045Ｂ、087Ｂ、126などから出土した土器を指標とする。ただこれまでと比較し、須恵器杯身・杯蓋の割合が増加し、土師器の総量がかなり減少して、その実態を浮かびださせるに困難な時期となっている。

杯は、須恵器杯蓋模倣の杯Ｃが組成にみられらなくなる。一見須恵器杯蓋に似た半球状の杯が存在するが、これは須恵器杯蓋の模倣でなく、おそらく金属器の影響によって出現してきたものと推測される。杯Ｄも、小型でたちあがりの長さが短いものや、須恵器杯身の受部に相当する張り出しが弱く、口縁部が内傾するものがわずかに残るにすぎない。本期で須恵器模倣杯が、一気に衰退する状況をうかがうことができる。さらに第Ⅳ期に出現した杯Ｅも、形骸化し、器高が低くなって消滅する。主体は杯Ｈと杯Ｇであろう。特に杯Ｈには口径・器高とも小さくなるものと、器高は低いものの口径がやや大きくなるものとが認められる。また杯Ｉの存在は確認ができないが、平底となる杯Ｊは第Ⅴ期から引き続いている。次に本期の塗彩や器面調整の特徴を指摘すると、まず視覚的な点では、明らかに黒色処理を施したという個体が減っていること、杯Ｈに赤彩されるものがあること、などを挙げることができる。調整では、杯Ｇの一部の内面に放射状の磨きが施されたり、杯Ｈに内面をナデによって調整するものがあり、前の時期では主流であった、「内面磨き調整→黒色処理」の手法が崩れている様相がみられる。

高杯は完形を保つ例が少ないが、組成の一角を占めてはいるだろう。認められる形態は、前時期からつづいて高杯Ｃと、本来高杯Ｃに含めるべき形態なのかもしれないが、高杯Ｅが本期のみに現れている。大きさの面では、第Ⅴ期には大型になる部類があったが、本期ではさほど大型にはならない点に気がつく。杯部内面にヘラ磨きが施されるが、積極的に黒色処理を行っているようすは現れていない。

甕は球状の膨らみをもつ甕Ａが小型の部類に残る。大型は甕Ｂ２が中心で、胴部最大径が上半部におかれる。また甕Ｂと甕Ｃを厳密に分離することが難しく、総体的に長胴傾向が進む。胴部外面の調整は、縦方向のヘラ削り手法が維持されている。

甑はＢ２類を認めるが、出土個体総数は少ない。

このほかの器種ではわずかの鉢があり、手捏ねは調査区域では出土していない。

第Ⅶ期

本期は竪穴住居跡086A、087D、088C、103、109、138などから出土した土器を指標とする。

須恵器の割合が増大し、土師器はこれまでの分類への対応が難しく、さらに新たな分類が必要となっている。杯はすでに現れていた半球状の丸底杯と、新たに、口径が大きく底部を偏平にした器高の低いものと、口径が大きく、器高の低い丸底のつくりで、口縁部と体部の境が、横ナデ、ヘラ削りの調整の違いによって生じるものなどがある。口径が大きく底部が偏平になるものは、杯Gからの系統になるかもしれないが、内面に放射状の磨きを施すものがなく、横方向の磨きになるなど異なる特徴をみせる。杯Dはわずかに残る可能性があるが、ほとんど消滅したといえる。また杯Jの系譜の存在も予想されるが、確認されていない。

高杯は高杯Cが残存すると思われるものの、実態は不明な部分が多い。ただ本期以降に高杯が盛行する状況は認められないので、高杯の終焉期になると考えられる。

甕は胴部上半に張りがあり、口縁部がくの字状に折れて開くものと、甕B2が認められる。どちらも胴部外面はヘラ削りによって調整される。

甑はB1類の伝統が引き継がれていると思われるものの、出土が少なく具体的でない部分が多い。

このほかの器種では鉢が存在する。

3．地域相と周辺の様相

これまで榎作遺跡において作成した編年案について説明してきたが、周辺の状況についても概観しておこうと思う。ただその前に今一度、二つの事項の整理をしたい。一つは区分を設定した主たる観点を示しておくことである。これについては、分類ごとの変遷を追いやすく、画期設定に第一に有効となった杯を取り上げて、下記のようにまとめてみることにする。それに加えもう一点、時期区分の記載・呼称についての整理である。これまでの時期区分は、榎作遺跡の固有の呼称であったので、他の遺跡で採用した独自の時期区分との混乱を避けるためにも、次のように変更したうえで話を進めることにする。まず榎作遺跡第IIc期を（1）期と仮によび、以下第Ⅲ期を（2）期、第Ⅳ期を（3）期、第Ⅴ期を（4）期、第Ⅵ期を（5）期、第Ⅶ期を（6）と改めておきたい。

榎作遺跡	第IIc期	須恵器模倣杯の黎明期	仮称 （1）期
	第Ⅲ期	須恵器忠実模倣杯の出現期	（2）期
	第Ⅳ期	黒色処理手法の出現期	（3）期
	第Ⅴ期	黒色処理手法の盛行と、小型化への転換期	（4）期
	第Ⅵ期	須恵器模倣杯の衰退・消滅期	（5）期

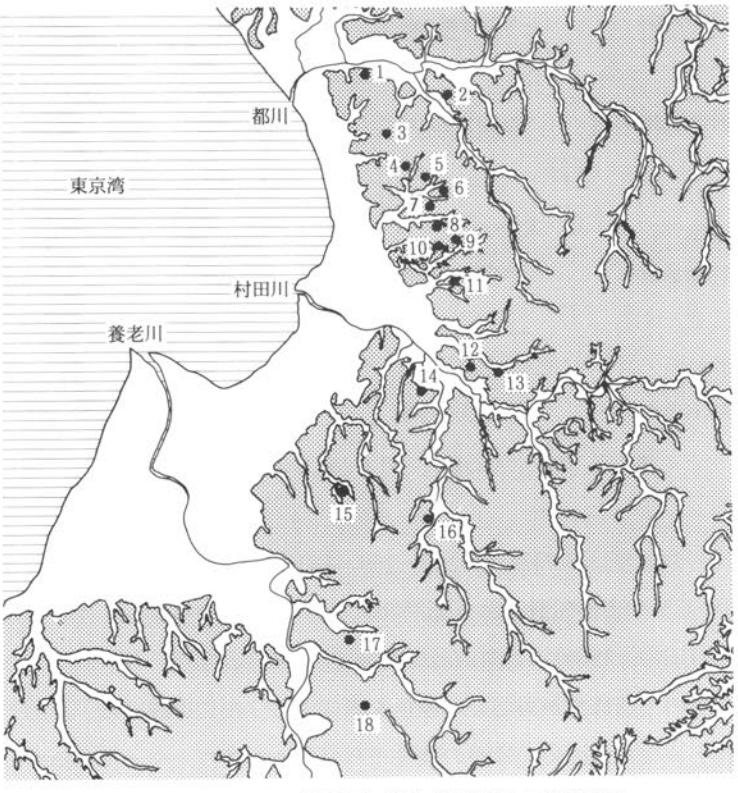
第 Ⅶ 期 （土器組成再編期） （６）期

それでは以上の観点に主眼をおいて、（１）期から（５）期の周辺地域の状況についてふれていこう。

（１）期

谷津遺跡（村田ほか 1984）の９・26・87住居址、高沢遺跡（関口ほか 1990）の050・131・175・157号住居跡、有吉遺跡（阪田ほか 1975）の036・053号址などの、出土土器様相が本期に相当し、榎作遺跡に近接する遺跡に、きわめて共通する土器組成が成立していることを確認することができる。養老川の下流右岸に所在する市原市叶台遺跡（大村 1992）の23・41号遺構（竪穴住居跡）の土器群にも、村田川流域と顕著な差異は認められない。

小沢洋氏が、木更津市周辺の遺跡を中心に作成した、「西上総地域における鬼高式土器の編年」（小沢 1992）（以下、西上総編年）の０期、村山好文氏の、印旛郡印旛村所在の平賀遺跡群の出土土器に基づいた編年（村山 1988）（以下、平賀編年）の第Ⅰ期、渡邊高弘氏による、山武郡芝山町地域の編年（渡邊 1992）（以下、芝山編年）のⅠ期などが、おおむね本期と並行すると考えられる。以上の地域では、杯Ａが顕著でないものの、杯Ｂが主体となることで共通する。細部に検討要素が内在するが、本期は村田川流域を越えて、広範囲にわたる近似した土器組成が展開する時期である。



1．矢作貝塚
2．西屋敷遺跡
3．大北遺跡
4．大森第２遺跡
5．谷津遺跡
6．仁戸名遺跡
7．榎作遺跡
8．種ケ谷津遺跡
9．有吉遺跡
10．高沢遺跡
11．椎名崎遺跡
12．草刈遺跡
13．中永谷遺跡
14．大廐遺跡
15．千草山遺跡
16．小田部新地遺跡
17．叶台遺跡
18．門脇遺跡

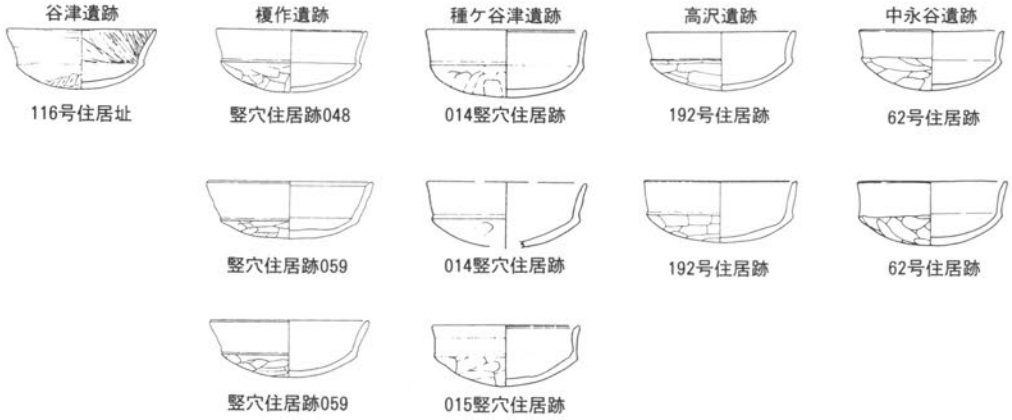
第３図 榎作遺跡周辺の主要遺跡

（2）期

榎作遺跡の南に、谷津を挟んで所在する種ヶ谷津遺跡（小林　1989）の、004・010・014竪穴住居跡（種ヶ谷津Ⅰ～Ⅱ期）、谷津遺跡の8・13・64・74・82・83住居址、高沢遺跡の092・099A・108・138A・200・230・278号住居跡、有吉遺跡の046・130号址、市原市の中永谷遺跡（白井　1991）1～2期、叶台遺跡の01・05・36号遺構の土器様相が対応する。これらの遺跡における、主要4器種の組成そのものに、際立った違いはないが、遺跡によっては若干の差異が現れている。榎作遺跡では古墳時代前期からの系統をもつ長頸壺が含まれないが、中永谷遺跡などで赤彩された長頸壺が出土していることなどが、その一例である。また杯C2類にのなかに、赤彩が施されない精巧なつくりで、搬入品である可能性を高くする杯（焼き色が橙色系統のもの）が数遺跡で出土している（第4図）。

本期は西上総編年の1～3期、平賀編年の第Ⅱ～Ⅲ期、芝山編年のⅡ・Ⅲ期が並行するものと考えられる。さらに上野純司氏による我孫子市日秀西遺跡第Ⅰ期（上野　1985）が相当する。

期間中に広域にわたって、杯C・Dが定着する状況が展開する。しかし、須恵器の模倣が精巧である地域と、それほどでもない地域があったり、芝山地域では内面に○に＋状、あるいは○に－状などの、記号のような特殊な赤彩が施された杯が分布し、日秀西遺跡では東北系（上野　1985）（長谷川　1992）とされる杯が組成に加わるなどの地域性も可視できる。



第4図　(2)・(3)期の搬入と考えられる杯

（3）期

谷津遺跡の31・69・73号住居址、高沢遺跡の116・159・166・168・240号住居跡、有吉遺跡の077、都川流域に所在する千葉市西屋敷遺跡（矢戸ほか　1979）の043号跡、中永谷遺跡3～4期、市原市千草山遺跡（田中　1989）の第127号住居跡、小田部新地遺跡（山口　984）の36号遺構（竪穴住居跡）などの土器様相が対応し地域色を形成する。榎作遺跡では、黒色系の色であれば、黒色処理の杯とみなしたので、ほかの遺跡より目立った存在となっているが、同手法が広範に一気に定着するとみなすことができる。また比企型の杯とした杯Fが、榎作遺跡で

は、この時期にしか現れていないし、数量もとぼしいことを述べた。周辺でも谷津遺跡の69号住居址に、1点認められるのみである。水口由紀子氏によれば（水口　1989)、この杯が5世紀末から7世紀にかけてつくられ、杯類に占める割合が、高い傾向を示す遺跡が分布するという。本地域のあり方は、まったく客体的であるというほかなく、一時的な搬入といえよう。また、村田川以南での出土例に接していないので、比企型杯の分布する南限が本地域となるだろう。

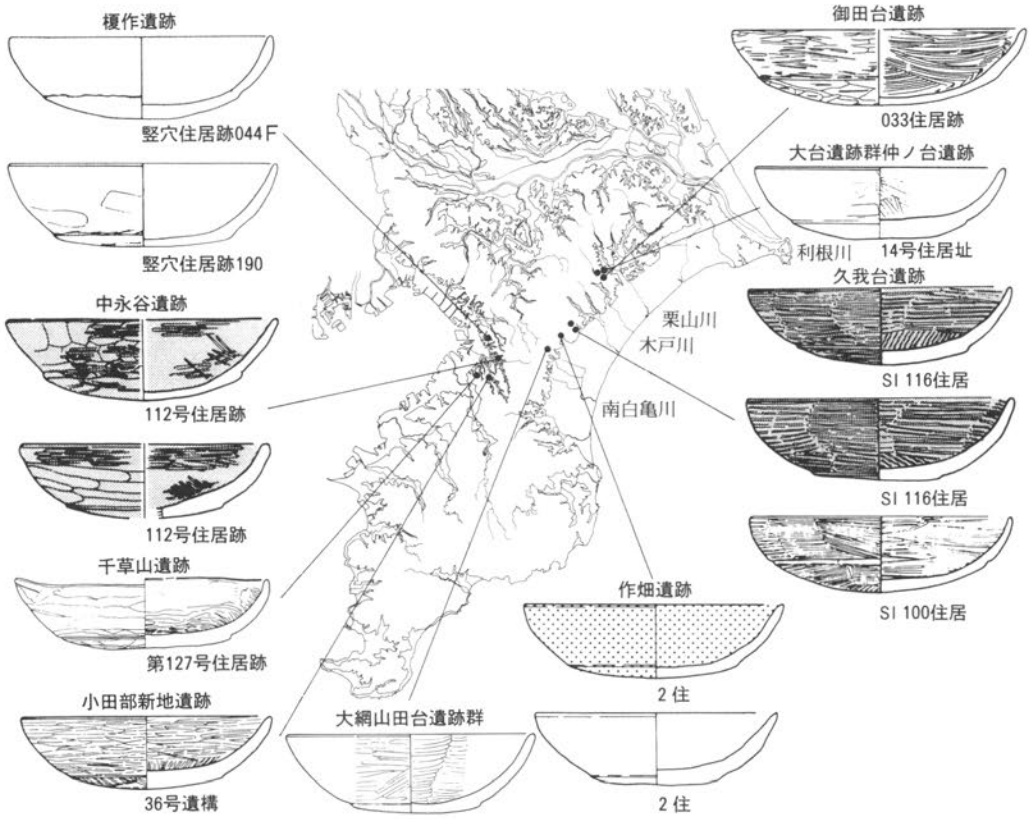
他地域と対比すれば、西上総編年の4～5期、平賀編年の第Ⅳ期、東金市久我台遺跡Ⅰ～Ⅱ期（萩原ほか　1988)、芝山編年のⅣ期、日秀西遺跡第Ⅱ期となろう。いずれの地域にも杯の黒色処理が出現し、赤彩を凌ぐようになる。ただ西上総では、その転換期には無塗彩のものも目立つという。また村田川流域では本期において杯Bが消滅するが、おなじように平賀遺跡群においても、和泉期からの系譜をもつ杯がこの時期に消滅する。ところで、榎作遺跡においても、その形態と丁寧な調整によって目をひいた杯Eは、本期と次期にのみ出現するが、分布範囲は今知る限りでは広範囲にはならい。多量に出土する分布地域は認められないが、村田川流域から東に位置する山武郡大網白里町山田台遺跡群№6地点（注2)、東金市作畑遺跡（桐谷ほか　1986)、妙経遺跡（注3)、久我台遺跡（注4)、山武郡芝山町御田台遺跡（渡邊　1992）などに類例があり、ちょうど下総地方と上総地方の境に沿うような帯状の、しかも狭い分布を示す傾向がみられる（第3図)。

さて本期の村田川流域の甕は、やや長胴傾向が進む甕Bが主体になるが、印旛沼や手賀沼の周辺を中心とする地域では、いわゆる「常総型甕」の出土量が増加する。この胴部中位から底部にかけて細かなヘラ磨きが施される特徴的な甕は、当初鈴木正博氏によって注目され（鈴木　1976)、村山好文氏が分布地域などを整理し（村山　1985)、現在本県の地域性を語る際に欠くことのできない器種として取り上げられている。榎作遺跡では破片さえも見当たらず、都川流域の矢作貝塚（清藤ほか　1981）にわずかに存在するのみで、改めて地域性をもった器種であることを認識することができる。一方、長胴の甕も東京湾東岸北部の船橋市印内台遺跡（道上ほか　1990）などで多出し、内陸や南岸沿いには分布域を拡大していない。そのような意味では、本期はきわめて地域性が浮かび上がる時期ともいえる。

（4）期

谷津遺跡30・167号住居址、高沢遺跡015・117・143号住居跡、中永谷遺跡4～5期などの土器様相が本地域の地域相を示す。すなわち、引き続き杯の器面処理手法に黒色処理が盛行するとともに、形態がさまざまになり、大きさが小型化へ転換する移行期となる。

他地域との対比は、西上総編年の6～7期、平賀編年の第Ⅴ～Ⅵ期、久我台遺跡Ⅱ～Ⅲ期、芝山編年Ⅴ期、日秀西遺跡Ⅲ期前半となるだろう。西上総地方では器高が低く底部の平たい椀形の杯や、内面に放射状のヘラ磨きを施すものがあり、村田川流域との違いを浮き立たせるよ



第5図 (3)・(4)期に出現する杯Eの分布

うになる。また東京湾東岸北部から下総台地北西部に所在する遺跡には、いわゆる有段口縁の杯を出土する遺跡が点在し、印内台遺跡のように目立って含まれる遺跡も散見されるが、都川以南や平賀遺跡周辺および下総台地東部に立地する遺跡では、まったくといっていいほど、典型的な有段口縁杯を組成に加える様相は認められない。

（5）期

谷津遺跡149号住居址、高沢遺跡127・180住居跡、大北遺跡（小林　萩原　1986）001・008・016号住居跡が対応する。土器様相に限定して周辺地域を見渡すと、本期の遺跡数・遺構数は激減する。中永谷遺跡では前の時期において集落は終わったとみなすことができ、谷津遺跡、高沢遺跡においても、確実にこの時期と断定できる遺構が少ない。遺物量がとぼしいこともあり、みかけ上遺跡が消滅した観さえある。おそらく（6）期と考えた土器群への転換が、すでに本期の期間内におこっており、それが短期間であったがための現象と理解することもできるが、問題のある時期であることには違いない。模倣杯は衰退消滅へとたどるが、丸底杯は残存する。

他地域と対比すれば、西上総編年8期、平賀編年第Ⅶ～Ⅷ期、久我台遺跡Ⅳ期、芝山編年Ⅵ～Ⅶ期、日秀西遺跡Ⅲ期後半に対比可能であるが、いずれの地域も遺跡数が減少するような状

況がみられる。

4．年代の想定と問題点

これまで、村田川流域の土師器の編年に基づく区分、および地域様相について述べてきたが、編年研究に共伴した須恵器を基準にした方法が、広く採用されている傾向がみられるなかで、須恵器と想定年代の問題についてはふれないでいた。須恵器に基づく方法は、各竪穴住居跡から出土した須恵器と共伴する土師器の特徴を抽出し、それを積み重ねて検証し編年を組み立て、年代観もそこから求めるというものである。かつて雨宮龍太郎氏が本地域を取り上げた際にも須恵器を機軸にすえている（雨宮　1985)。さらに白井久美子氏は、市原市中永谷遺跡の集落の変遷を明らかにするために、陶邑の型式編年に基づいて時期区分を行い、そのうえで土師器に現れた二つの画期をとらえ、年代観も須恵器から導いているし、また小沢洋氏の、「西上総地域における鬼高式土器の編年」では、陶邑編年を前面におき、その横ならびに出土土師器をあてている。

編年の機軸として須恵器を用いる有効性は、生産地における編年が確立されていることと、製品が広範に流通していることにあろう。これは、広域にわたる土師器の並行関係を考えるうえで、まことに好都合となり、説得力をもつことになる。しかし、筆者は無批判的な「須恵器生産地編年の全面的な援用」には危惧をいだくのである。

現在須恵器のかかえる問題点はいくつかあろうが、消費地では、陶邑編年を基本とする「生産地編年」への対応の仕方と、そこから派生する想定年代が、実態に照らして整合するか検討しておかなければならないと考えている。まず根本的に、本地域で出土する須恵器が、「生産地編年」のどの段階に比定できるのか、比定しても、はたして正しいのかというような、型式認定の正否が当初から含まれている。それと奈良時代に近づくにつれ、東海地方をはじめとする、供給元の多元化がみられ、その生産地における型式のあり方が、必ずしも陶邑と同様ではないことも、検討材料としてあげることができる。加えて、年代の想定となると、問題はさらに多岐にわたる。列島における須恵器生産の開始時期が、これまでより古くまでさかのぼれる可能性が議論されるなかで、5世紀代の須恵器の年代観全般が揺れ動いている現状がある。その影響をうけ、5世紀～6世紀前半の土師器の年代観のみならず、7世紀代についても動揺をきたしている傾向があることも考慮の必要があろう。

年代観についてもう少し述べておこう。衆目を納得させる年代の裏づけは、年代を示す文字資料との共伴がもっとも説得力をもつことになる。かつて筆者は、市原市の養老川右岸の台地上に所在する門脇遺跡から出土した、高台付の須恵器の杯を報告したことがある（小林 1985)。それは、湖西産と考えられる須恵器で、後藤建一氏の「湖西古窯跡群須恵器編年モデ

ル」（後藤　1991）にしたがえば、第Ⅳ期第１小期に比定できる杯である。その底部外面に「海里長」（注５）という墨書が記されていたのである。この墨書は、「国郡里制施行期間である霊亀元年（715年）までに使用されていた」ことを示すもので、須恵器の年代観におよぼす影響は少なくない。また、同様な段階にある須恵器が、多量の平城Ⅰの土師器と共伴し、しかも在地の土師器杯を含む例が、千葉市の大北遺跡018住居跡（小林　萩原ほか　1986）にある。そしてその土師器がここでいう（６）期の土師器に相当するのである。したがって、以上のような有力な文字資料と平城Ⅰの土師器という資料的な裏づけによって、（６）期を８世紀の初頭に位置づけて妥当と考え、報告書では（６）期（榎作第Ⅶ期）を一つの定点とした。

ところで、前節まででふれたように、（６）期にいたると須恵器の土器に占める割合が増大し、かつ器種構成全体が様変わりしている。その萌芽は、（５）期段階の後半であったと考えられるが、前述した湖西編年モデルの、第Ⅲ期第３小期に比定できる須恵器を多出する例は、村田川流域ではかなり限定されるのではないだろうか。白井久美子氏が、上総北西部の古墳終末期の様相をまとめた論文中（白井　1992）で示したような、「金鈴塚古墳出土の杯蓋・杯身」→「諏訪台174号墳出土杯蓋・諏訪台５号墳出土杯身」といった、７世紀後半後期とされる典型的な須恵器の組み合わせの変遷は、集落遺跡ではほとんどとらえられないともいえる。例えば、千葉市西屋敷遺跡（矢戸ほか　1979）の060号跡（竪穴住居跡）では、かえりをつけない杯蓋と高台付き杯身と、受部を有し、たちあがりが短く内傾する丸底の杯身が、床面から出土している。このような状況こそ、村田川流域の各所に認められるあり方であると思われ、（５）期の後半まで、湖西編年の第Ⅲ期前半の須恵器の共伴が、継続されていると考えられるのである。しかし、須恵器杯身を模倣した土師器の杯が、（５）期の前半では残るとしても、（６）期の特徴的な形態の一部については、すでに（５）期に成立していたと思われ、そのような観点から、土器様相が一変する（６）期の前に一画期、すなわち（５）―（６）期が設定できる可能性も大いにあり、今後の課題としておきたい。

年代想定で（６）期の土器組成を、８世紀初頭とする見解には、大方の同意が得られるであろうと思っている。（５）期はその前の段階であるので、今は、時間幅を広くとって７世紀の後半と考えている。これも今後、畿内産土師器などとの共伴例が増えれば、実年代で示す事が可能となるはずである。

さて、論題に「６～７世紀」と記したのだから、６世紀も検討の範疇にいれなければならない。須恵器の出現期が流動的なので、修正を繰り返すことが予想されるが、（１）期の榎作遺跡の竪穴住居跡047Ｂから出土した須恵器を、TK47に比定し、その年代を５世紀後葉とみたい。年代観を須恵器に求めては、ここまでの論とは矛盾をきたすことになるし、また格別の根拠に基づくものではないが、（１）期に続く（２）期を６世紀前半に、そして（３）期をその後半に位置づけておくことにしたい。（４）期はそれに続くので７世紀前半になろうか。

榎作遺跡では、周辺の数多い調査例のなかでも、須恵器の出土量は突出して豊富であった。これをもって、遺跡の特徴としてよいほど、須恵器を複数で出土する竪穴住居跡が多く検出された。須恵器を機軸にして編年を組み立てるには、絶好の遺跡ともいえる。その遺跡で筆者は、須恵器をとりまく問題を消化できないままで作業を進めたため、有効に活用しきれず、課題だけを多く抱えてしまった。

5．まとめにかえて

出土した土器がいかなる理由によって竪穴住居内に残り、発掘するまでに地中においてどのような変異要因を被ったのか、あるいは何も変化がなかったのか、通常の台地上の調査でこの点について明快な答を出すことは至難といわざるをえないだろう。筆者は、少なくとも「床面上・竈・貯蔵穴内から出土した遺物は、住居で使用されていたか、住居の廃絶時に近い時期に存在していたものであろう」と解釈している。これが前提である。しかし竪穴住居跡から出土する土器は、最終的に使用者から見放された、要は器や煮沸用具としての本来果たすべき用途が停止した状態のものであり、製作から使用の時間は考慮されない、個々の最終的な姿ということになってしまう。それは土師器、須恵器を問わず同様である。したがって、単に時間の前後関係を究明しようとすれば、究極には個別の製作時期を明らかしなければならなくなるだろう。それを消費の最終の場である竪穴住居跡で求めることは困難であり、無意味な作業である。土器類はあくまでも当時にあっては生活に密着していた道具であり、生産から消費のなかできわめて自然に使われていたものである。

生産された土師器は、流通ルートにのって消費者に渡り、使用される。その場合、生産された土器を一括して消費者が手にした場合もあるだろうし、補充などで単品で入手したこともあったと想像される。実際に竪穴住居跡から出土する、道具としての土師器を目にすると、形態あるいは製作技法・手法上の違いが認められるものが混在し、数量もまちまちである。発掘で出土する遺物の、常識的で当然な事象である。それは廃棄における一括性が、製作時の同時性を示してはいないし、ましてや消費過程を具現してはいないことを物語るのである。そこに画期をみいだすには、より目につく特徴を抽出し、その横ならべの整合性を検討したうえで、それが定着したと認識できる段階をもって区分することによって、共通理解がえやすいと考えられる。すでに問題点として述べたように、過渡期の設定が考えられる部分もあるので、細分はさらに進められることになる。だが、いまだ年代観がかみあわない状況がみられるなかでは、ますます相互の認識に違いが生じ、隣接した遺跡間で対比を行おうとしても、まったく話ができなくなる心配もある。この時期の土器がますます細分化されている昨今、時流に逆行するような、大まかな画期を設定した理由は、遺跡間の様相の対比を容易にするための、「目につく

画期の設定」を目指したのである（注６）。

いずれにせよ、土器に変化が現れてくるが、それをもたらす契機を何に求めることができるのだろうか。製作側、つまり工人側における技術の進展や刷新、あるいは製作集団を管理する側のさまざまな要求の変化、いわば政治・経済・社会的変化への対応の結果と言い換えてもよいかもしれないが、そのようなまったく消費者側の関与できない部分での理由が大きいだろうし、また、住・食生活の根本的な転機に伴う一般の消費者側の要求の変化（注７）、流行とでもいう現象でおこったことも推測される。

では今回ここで提示してきたような、土師器の画期は何によって引き起こされたのだろうか。初期においては須恵器の生産が、地域性の強い土師器に、形態や技術面で影響を強く与えたことは、模倣杯の登場が如実に示している。しかし、模倣杯が画一的でなかったように、その後、必ずしも須恵器の変化に土師器が追随した状況は認められず、むしろ多彩な展開をみる。あくまでも土師器は、独自の生産体制でつくられていったと理解してよいだろう。そして地域性が顕在している事実は、何らかの政治的意味合いを含む生産であった可能性を示すが、一方、黒色処理にみられるような広範囲に及ぶ手法の流布や、他地域の特徴的な土師器の出土は、土師器生産にたずさわった人々の情報交換や、もの自体の長距離移動が少なからず存在したことをも示唆している。そうなると、特に規制されたなかでの製品の流通でもなっかたと考えられるし、まったくその逆に、特定流通ルートが介在していた可能性も想定されてくる。現段階では、該期の画期は「在地に根ざした土師器生産にもたらされた新情報の導入に因っておこり」、地域性は「消費者と結び付いた、伝統的生産体制でつくられた土師器の通常の流通範囲」、と表層的な解釈にとどめおくしかない。実際に「流通範囲」は複雑に交錯しているので、それを確定するには、かなりの困難が伴うことになろう。榎作遺跡をはじめ、当地域ではこの時期の土師器の生産を、具体的に実証する遺跡は調査されていないので、「今のところ生産の実態と、厳密な流通を裏づける手だてがない」ともいえるが、これは言い訳にほかならないであろう。

今回行った補足は、榎作遺跡出土の土師器による画期の整理と、地域性を浮かび出させようとした試みである。結果、画期については７世紀の後半代で曖昧さが残り、地域性は鮮明さに欠ける推測しかだすことができなかった。今後榎作遺跡の全面的な見直しをすすめながら、本テーマに注意をはらっていきたい。

小稿をまとめるに際し、永嶋正春、田村隆、白井久美子、金丸誠、糸川道行、萩原恭一、山口直人、小林信一の各氏に色々とご教示いただきました。文末でありますがお礼申しあげます。

注

1．報告書（小林ほか　1992）では、数量的に杯Cが杯Dを上まわると記述したが、その後の見直しの結果、杯Dが杯Cを凌ぐことが明らかになった。

2．財団法人山武郡市文化財センターによって調査された遺跡で現在整理中。筆者実見。

3．財団法人千葉県文化財センターが平成元年度に発掘調査を実施した遺跡で整理中。平成5年度報告書刊行予定。成果の一部概要については『千葉県文化財センター年報№15』（1990）、および（糸川　1992）に報告されている。

4．久我台遺跡の報告書（萩原ほか　1988）の附章において、永嶋正春氏がカラー図版（PL 2～PL 4）に示したSI116―6の杯などが代表例となる。なお、永嶋氏の本文中では、「器型は東北系」とされている。

5．報告書作成時点（小林　1985）では、3文字の第1番目の文字を「海」と読むことに躊躇し、「□里長」と□で空白にしておいた。その後数名の研究者の方から「海」と判読できることのご教示をうけ、現在は「海里長」と認識している。

6．大村　直氏は、叶台遺跡の報告のなかで（大村　1992）、「現状の編年研究は、実態レベルでおこなわれることによって、「目につく」、分類基準が明確であるものほど軽視される傾向」があることを述べている。

7．岩崎卓也氏は、「日常生活の用具としての土師器の側面が、在地の人びとの生活様式からくる慾求に応える必要を生じさせていたことも考慮したい」（岩崎　1991）と、地域性の現れを消費者側の要求の変化にある可能性を指摘している。

引用・参考文献

雨宮龍太郎　1985　「後期古墳時代有吉遺跡の研究」　『研究紀要』9（財）千葉県文化財センター

糸川道行　1992　「東金市妙経遺跡」　『千葉県遺跡調査研究発表会発表要旨』　千葉県文化財法人連絡協議会

岩崎卓也　1991　「総論　F．土師器研究の現段階」　『古墳時代の研究』6　雄山閣出版株式会社

上野純司　1985　「鬼高式土器の細分をめぐって―我孫子市日秀西遺跡出土の土器を中心として―」　『論集　日本原史』　吉川弘文館

大村　直　1992　『市原市叶台遺跡』（財）市原市文化財センター

小沢　洋　1992　「上総地域の鬼高式土器」　『考古学ジャーナル』№342　ニューサイエンス社

金丸　誠　1992　「下総地域の鬼高式土器」　『考古学ジャーナル』№342　ニューサイエンス社

桐谷　優ほか　1986　『作畑遺跡』　作畑遺跡調査会

後藤建一　1991　「須恵器の編年東海」　『古墳時代の研究』6　雄山閣出版株式会社

小林清隆　1985　『市原市門脇遺跡』　（財）千葉県文化財センター

小林清隆　萩原恭一　1986　「大北遺跡」　『千葉急行線内埋蔵文化財発掘調査報告書II』　（財）千葉県文化財センター

小林清隆　1989　『千葉市種ヶ谷津遺跡』　(財) 千葉県文化財センター

小林清隆ほか　1992　『千葉市榎作遺跡』　(財) 千葉県文化財センター

阪田正一ほか　1975　『千葉東南部ニュータウン3－有吉遺跡（第1次）－』(財) 千葉県都市公社

白井久美子ほか　1991　『市原市中永谷遺跡』　(財) 千葉県文化財センター

白井久美子　1992　「上総北西部における古墳終末期の様相」　『国立歴史民族博物館研究報告』　第44集

杉山晋作ほか　1987　『房総における古墳時代後期土師器の年代と地域性－第6回総括シンポジウム資料集－』

鈴木正博　1976　「水戸市南台遺跡出土の土師器と須恵器」　『常総台地』 7号

清藤一順ほか　1981　『千葉市矢作貝塚』　(財) 千葉県文化財センター

関口達彦　1990　『千葉市高沢遺跡』　(財) 千葉県文化財センター

田中清美　1989　『千草山遺跡・東千草山遺跡』　(財) 市原市文化財センター

永嶋正春　1987　「鹿沼市稲荷塚遺跡出土品の材質と技法－古墳時代後期の、漆による表面仕上げを施した土師器を中心に－」　『稲荷塚・大野原』　栃木県教育委員会

永嶋正春　1988　「漆仕上土師器について」『東金市久我台遺跡』　(財) 千葉県文化財センター

永嶋正春　1992　「榎作遺跡出土土師器の表面処理方法について」　『千葉市榎作遺跡』　(財) 千葉県文化財センター

萩原恭一ほか　1988　『東金市久我台遺跡』　(財) 千葉県文化財センター

長谷川　厚　1989　「神奈川・千葉県地域の赤彩土器・黒色処理土器について」　『東国土器研究』　第2号　東国土器研究会

長谷川　厚　1991a　「古墳時代後期土器の研究(3)　―房総地域の諸相について―」　『神奈川考古』　第27号　神奈川考古同人会

長谷川　厚　1991b　「土師器の編年　―関東―」　『古墳時代の研究』 6　雄山閣出版株式会社

長谷川　厚　1992　「古墳時代後期土器の研究（4）　―古墳時代後期土器からみた広域間の交流について―」　『神奈川考古』第28号　神奈川考古同人会

水口由紀子　1989　「いわゆる〝比企型坏〟の再検討」　『東京考古』 7　東京考古談話会

道上　文ほか　1990　『印内台遺跡　―第7次・8次調査報告書―』　船橋市遺跡調査会

村田六郎太ほか　1984　『谷津遺跡』　千葉市教育委員会

村山好文　1985　「印旛手賀沼周辺における古墳時代後期の特異な甕形土器について」　『日本考古学研究所集報Ⅶ』　日本考古学研究所

村山好文　1988　「平賀遺跡群における古墳時代後期土器の再検討」　『日本考古学研究所集報X』　日本考古学研究所

矢戸三男ほか　1979　『千葉市西屋敷遺跡』　(財) 千葉県文化財センター

山口直樹　1984　『小田部新地遺跡』　(財) 市原市文化財センター

渡邊高弘　1992　『主要地方道成田松尾線Ⅶ』　(財) 千葉県文化財センター